
この一時を目に焼き付けて

時津風洋々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この一時を目に焼き付けて

【Zコード】

Z8897Y

【作者名】

時津風洋々

【あらすじ】

西暦20XX年

人類の99%は死滅した

数少ない人類の生き残りは新たに地球上を支配する生物たちに翻弄されていく

僕はいつして生き残った

「 ここにちは
まずはこれを見てくれていいであるう人に重要な事実を伝えなけれ
ばならないのかもしけない
どうしてこうなったのか

なぜこうなったのか

自分の胸に手を当てて考えてほしいと思つ
きつとそれは我々、人類にとつて大きな分岐点であつたはずなのだ
から

少し回りくどいかもしけないが、まずは聞いてほしい

まずは例え話を始めるとしよう

君は物語の主人公だ

君はある日、生態系のトップから落ちたとしよう
よくあるSFモノのように地球外生命体が侵略してきた
とか

ある種の動物が超進化してもいい

君がこの地球でぬくぬくと暮らしていっているのは人類がトップで
あるからだ

そこに、地位を脅かす存在が出てきたら君はどうする？

銃を手に取り戦う？

ハハハ…

そこだ

そこを間違えてしまつたんだろうな

僕らはすぐに争いを選択してしまうつていう愚かな生き物なんだ

何も平和主義者や非暴力を訴えかける団体つてわけでもないんだ

そう…

これは仕方ないことなんだ

個人の思想がどうこうじゃなくて

人類つて種が選択を間違えてしまつたんだろうな

そんなことを考える冬の日

僕は数少ない

頂点を追われた人間の生き残りの一人になつたんだ

さて

話を聞いてもらつてなんだが

実際のところはあまりよく知らない

その理由については簡単だ

人類終末の日

僕は眠つていた

いや、眠らされていた

…らしい

どうにもおぼろげな記憶を辿つていくと
その日に僕はこの街を歩いていた

休日には数多くの人が賑わい
あまりの人の多さに眩暈をおこしそうになるくらいだ

僕はあまり人ごみつてのは好きじゃない

出来れば家の中で一人でゆっくりと過ごしてみたい人間だと思う

そんな僕がだ

そんな僕が…わざわざ好き好んでこの街にやつてきたのにはある理由があつたと思つ

さつきから自分の認識に自信が持てていなかつたの

そりやそりや

僕は眠りから覚めたときに何もかもを失つていたんだから

友人のこと

家族のこと

いたかは定かではない恋人の事

記憶を失つていた

眠りから覚めたときに何もかも失つていた

なんだろうか

不思議と悲しみはない

そりやそりや

悲しむべき対象との記憶がなくなつてゐる

人間は相対的にしか自分の感情に確証が持てないものなのかな

ただ、自分という存在がごつそり持つていかれたような気がする
確かに今の状態を当たり前と思つてしまえれば無駄な喪失感なんて
感じないのかもしね

しかし、常識のすべてを失つたわけではない
何かが足りない
何かがおかしい

相対的な感情が僕には存在していることは否定できないだろう
そんな残り物のようなものでも、自分という存在のきっかけになる
んだつたらましだと思つ

さて

これから話すことは僕たち人類に課せられた一つのテーマなんだろ
うと思つ

僕ごときが人類に対してあれこれと壮大な事を語るなんておこがま
しいものであるけれど

なんてことはない

すべて僕の目線での事実で
僕の目で見た今を語るだけだ

これが今の世界だよ？

楽しいおはなし たのしくないお話 面白くないおはなし

外は寒い寒い

冬

僕は窓から見える街並みを見下ろしながら、簡素な椅子に腰をかけ温かいコーヒーを飲んでいた

生きている

そう何ら変わりがないように見えるこの街で僕は生きている

唯一の生存者として

「つべつ、にげえ…砂糖いれんの忘れた…」

角砂糖でいつもこのの一個相当を入れないと飲めないのである
僕はおもむろに砂糖を探す…

台所といつにはあまりにもお粗末な簡易キッチンにある戸棚を手探りで。

本来であるならこの街は住むにはあまり適さない場所だ
もちろん古くから住んでいる人間もいたろうから、そういう人からしてみれば非難を受けるかもしれない

僕のおぼろげな記憶がそう語つていて

全てを失つたわけじゃない

住めば都という言葉があるがまさにその通りだ
人がいなくなつたこの街でも僕はこうして生きていけている
飢えや急激な環境変化もなく
サバイバル生活を強いられる必要もない

そして何より孤独感すら皆無といつてい

それは少し違うな

孤独感はないわけじゃない

想像してほしい

『あなたは人類最後の生き残りです』
目が覚めたら突然言われたらどう感じる?

その絶望感に打ちひしがれるのだろうか?
それとも別の何かの感情?

人間は自分だけは死なないと思つてゐる

大災害にあつた人

何らかの事件に巻き込まれた人

おそらく、自分が今日死ぬと思つ人間はまずいないね

だけど、同時に自分が地球上で必ず生き残る最後の一人とも考えないだろ

そんなに自分に自信を持つてゐやつてのはツチノコよりもお田に
かかれないと

案外に人間はそんな非現実的な状況に自分を重ね合わせられないも
んだよ

もちろんSF小説や映画、漫画。…媒体はなんでもいいか

人間は絶対にありえない状況として自分を重ね合させてみるんだ
だからこゝを楽しめるし娛樂として成立するんだよな

僕はいまだにこゝの非現実と自分の現実をうまく重ね合せられない
でいる

もちろん実感する場面がないわけでもないが
どこか遠い出来事のように感じてしまつてしまつがない

ゆとり教育の弊害だろうか？

俗にいうゲーム脳というとか？

…ふう、こんなろくでもないことは記憶として多少は残ってるんだな

不思議なもんだ

さて、僕の脳内語りはこゝらへんにしておくか

「おお…砂糖みつけ。…つてカラかよ」

砂糖が入っているはずの瓶を手にして面倒くささを吐露した
そういうえば昨夜に飲んだ時に切らしてたんだっけ

こんな風に独り言をつぶやいて脳内会話を囁んでいるのも田覚めて
からの気がする

「ここまで寂しい奴じゃなかつたはずだと思いたい

「しょうがない。砂糖を仕入れに行つてくるか…」

「外は冷えるぞ。厚着をしていけ。お前は人間なんだから風邪とい
うものを患つやもしれん。」

「ああ… そつだつたな。この部屋も少し肌寒いくらいだしな。あり
がとう」「

僕は忠告に従い、だらしないアニメキャラのプリントされたロング
Tシャツの上から厚手のコートを羽織る

残念ながらこのTシャツは僕の趣味ではないし、日常から着用して
いるわけではない

この非日常のなかでは仕方がなく着ているだけなのだ

僕は日常的に着てている人間をバカにしているわけではない

ただ、センスの違いを理解していただきたい

こういう趣味があるわけではない

やむをえないということだ

寒空の中にいかなければならぬ憂鬱を抱えて僕はドアノブに手を
かける

「ああ… ついでにアイツを迎えて行つてくれ。そろそろ仕事が終わ
つていいはずだ。」

僕はドキリとした

アイツという単語に異様な恐怖感を覚えた

「…別にアイツは…俺が迎えに行かなくてもいいだろ。勝手に帰つてくるわ」

「そんなことはないぞ。アイツはお前が行けば喜ぶだらうぜ。」

：喜ぶ？

何を言つてるんだ

喜怒哀楽でいうとこの、怒りという感情の高ぶりを抑えられそうになかつた。

曲がりなりにも喜びという感情はおかしい

間違つてやがる…

「…くそつ…――やけんなつ…――」

僕は勢いよくドアを閉めて外に飛び出した
それほどまでにアイツは俺の神経を逆なでする

割り切れるといつことはすぐ大事である
自分の感情に対しても理由付けができる
そうすることで安定を保とうとするのが人間だ

しかし理屈は分かっていても
どんなに理解をしていても

それすらも飛び越えてしまつようなモノが感情だ

人間は愚かだ

合理的じゃない

そして

間違いなく僕も愚かな人間の一人だ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8897y/>

この一時を目に焼き付けて

2011年11月29日20時52分発行